

研修員報告 〈テニス 植田 実〉



平成14年度・長期派遣（テニス）

I. 研修題目

強化システムの修得及び指導プログラムの研修

II. 研修期間

平成14年12月9日（バルセロナ到着）～平成17年1月23日（日本帰国）
（平成16年7月7日～8月28日までは、アテネオリンピックの為、研修休止）

III. 研修地及び日程

研修スケジュール

2002年（平成14年）

- ・12月10日～ サンチェス・カサルテニスアカデミーにてコーチング研修
基本となるドリル練習の方法把握。



コーチングスタッフ



お世話になったアンヘル・ヒメネス氏

2003年（平成15年）

- ・2月5日 C.A.R（ナショナルトレーニングセンター）の視察
- ・2月7日 Andres Gimeno テニスクラブの視察
- ・3月1日 バルセロナサテライト第1戦・Tennis Club Manresaで大会視察
- ・3月8日 バルセロナサテライト第2戦・Tennis Club Badalonaで大会視察
- ・3月15日 バルセロナサテライト第3戦・Athletic de Terrasaで大会視察
- ・3月29日 バルセロナサテライト最終戦・Cercle Sabadelle 1856で大会視察



スポーツ指導者海外研修事業報告書

- ・ 4月10日 モンテカルロオープン及びモンテカルロカントリークラブ視察



最高のロケーションにあるモンテカルロカントリークラブ。観戦は食事をしながら。

- ・ 4月20日 バルセロナオープン及びReal Club de Tennis Barcelona 1899の大会視察



優勝のモヤ（スペイン）



特設スタンドで7000人収容

- ・ 5月26日 フレンチオープン大会視察（フランス・パリ）



予選決勝で惜敗した鈴木選手



浅越選手とTV解説の伊達公子さん

- ・ 6月13日 ローランギャロ・フランステニス協会ナショナルセンター視察
- ・ 7月20日～24日 世界水泳（バルセロナ）観戦
- ・ 6月末～8月末 アカデミー（バルセロナ）のサマーキャンプで、コーチング研修
- ・ 8月27日 マヨルカ島のマナコールテニスクラブの視察



スペインテニスの英雄となった18才ラファエル・ナダル選手の育った、マナコールテニスクラブ。夏のバカンスのため、クラブは閉鎖していたが、コート管理をする人たちも皆ラファエルの小さい時の話をする。

- ・ 9月11日～12日 バレンシア地方のテニスクラブ視察（アリカンテ他）
21年前の遠征でプレーしたテニスクラブを訪ねた。



ハティバのテニスクラブ



デニアのテニスクラブ

- ・ 9月14日 マノロ・サンタナテニスクラブ、ルー・ホードテニスクラブの視察（マラガ）
サンタナ氏はスペインテニスの歴史上もっとも活躍した選手。
ホード氏はオーストラリアの名選手でスペインに移り住んだ。



スポーツ指導者海外研修事業報告書

- ・ 9月19日～21日 デビスカップ準決勝・スペイン対アルゼンチン戦の大会視察（マラガ）



14000人の観衆



スタンドは鉄のパイプで組み立てているので
応援で揺れる。

- ・ 10月2日 ドイツテニス協会、リチャード・ショーンボーン氏を訪問(ドイツ・ハノーバー)



リチャード・ショーンボーン氏の庭にて

- ・ 10月4日～5日 ドイツのテニスクラブ視察（デュッセルドルフ）



ドイツ・ブンデスリーグ優勝のデュッセルドルフ・ロホスクラブ

- ・10月8日、10日 男子ITFチャレンジャー大会視察（バルセロナ）
- ・10月20日～26日 ITFコーチワークショップに参加（ポルトガル・ファロ）



参加した梅林氏、須田氏、道上さん



ITFのレイド氏、USTAのバーンステイン氏

- ・11月4日 スペイン・カタルーニャ州テニス協会・コルネアテニスセンター視察



テクニカルディレクターのアルバロ・マルゲッツ氏

- ・11月11日 C.A.R（ナショナルトレーニングセンター）の視察
- ・11月19日～28日 ポブ・ブレットテニスアカデミーにて研修（イタリア・サンレモ）



地中海に向かって立つソーラロテニスクラブ

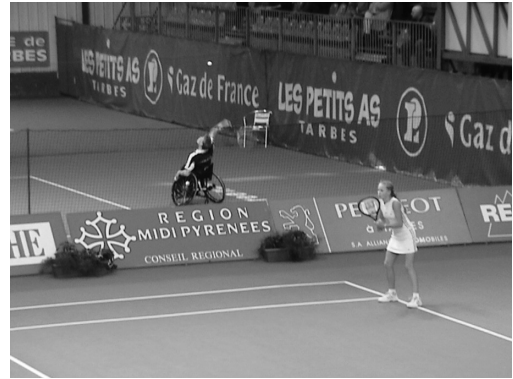


2004年（平成16年）

・ 1月26日～31日 U-14世界選手権の大会視察（フランス・タルブ）



14才以下のグランドスラムといえる大会は多くの観客が入る



車椅子大会も同時に開催される。

・ 2月8日～26日 ボブ・ブレットテニスアカデミーにて研修（イタリア・サンレモ）



セルゲイ・ブブカ氏、ボブ・ブレット氏



ボブ・ブレット氏によるコーチング

・ 3月21日～28日 ナスダックオープンでの選手サポート・大会視察（アメリカ・マイアミ）



いかにもマイアミらしい雰囲気



会場はUSTAのナショナルセンターでもある



- ・ 4月19日 男子ITFチャレンジャー大会視察（バルセロナ）



スペインテニス留学中の15才、藤木貴大君。試合を見ながら出番を待つ。

- ・ 4月22日～26日 フェドカップ、日本対アルゼンチン戦の日本チームサポート（アルゼンチン・ブエノスアイレス）



抽選会での両国チーム



練習前の小浦監督、選手、スタッフ

- ・ 5月5日～8日 アテネオリンピックのテニスセンター視察（ギリシャ・アテネ）



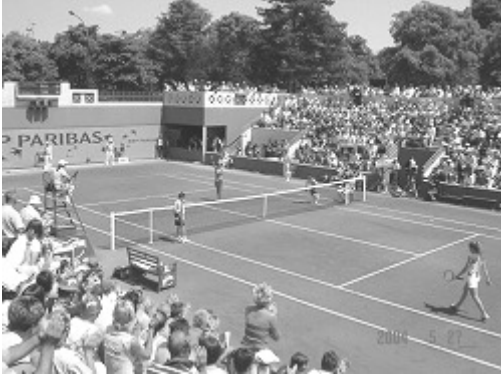
第1回近代オリンピック開催のスタジアム



工事中のテニスセンター

スポーツ指導者海外研修事業報告書

- ・ 5月22日～6月3日 フレンチオープン日本選手サポート（フランス・パリ）



浅越自身初の4回戦進出を決めた瞬間



セレナ・ウィリアムスとの対戦（センターコートにて）

- ・ 6月5日～14日 日本ジュニアナショナルチーム合宿（バルセロナ）サポート
- ・ 6月19日～30日 ウィンブルドン日本選手サポート（イギリス・ロンドン）



ウィンブルドン・センターコート



まだ使われていない絨毯のような芝



ウィンブルドンのマーク



杉山ーシャラポワ戦、シャラポワ勝利の瞬間

- ・ 7月7日～8月29日 アテネオリンピック監督の為、研修休止（日本、ギリシャ）



エーゲ海のブルーで作られたセンターコート



開会式にて

- ・ 9月1日～8日 USオープン日本選手サポート（ニューヨーク）



アーサー・アッシュスタジアム



USTA ナショナルテニスセンター

- ・ 9月9日～12日 アメリカ・フロリダのテニスクャンプ視察(ブラデントン、タンパ)



フロリダ・ブラデントンにある IMG テニスアカデミー



米沢コーチが日本のジュニアを担当しケアしている。



スポーツ指導者海外研修事業報告書

- ・ 9月21日～27日 ジュニアデビスカップ、フェドカップ合宿（バルセロナ）
- ・ 9月28日～10月3日 ジュニアデビスカップ、フェドカップ日本チームサポート



開会式



サービス練習する男子チーム

- ・ 10月10日、12日、15日 男子ITFチャレンジャー大会視察（バルセロナ）
- ・ 10月19日～21日 スペイン・バスク地方のペロータ競技視察（サン・セバスチャン）



修道院横にあるペロータ・バスカを行うコート（フロントン）



- ・ 10月22日～24日 男子ITFフューチャー大会視察（バルセロナ）
- ・ 11月16日～17日 女子ITFチャレンジャー大会視察（バルセロナ）



会場は 100年の歴史を持つクラブ（センテナリークラブ）

- ・12月2日～6日 デビスカップ決勝、スペイン対アメリカ戦の視察（セビーリャ）



陸上競技場の片方のコーナー部分を利用した会場設営

- ・12月11日～18日 カタルーニャ州選手権視察（バルセロナ）



12月にはオーストラリアに向け、ハードコート選手権が開催される。

IV. 研修概要

(1) スペインテニス

①練習環境

この数年間スペインテニスの活躍は目を見張るものがあり、研修の地に決めたのはその理由からである。

ヨーロッパ諸国の中にあって、特にクレイコートプレーを基本とするのがスペインである。

自分たちのプレーを生かすのは、クレイコートしかないと考えており、練習方法、戦術もその方向性の上に成り立つ。試合中の大半を費やすグランドストロークラリーが練習の主となり、かつて世界ランキング100位に入った経験を持つコーチたちが指導現場に立つ。

その選手とコーチが日頃の努力・成果を試すための大会が、ほぼ一年間通じて開催されている。選手もコーチも自分の技量を試すことで上達するわけで、その大会システムはスペインの強さを支えるためにもっとも貢献しているといえる。



スペインは年間通じて温暖な地中海性気候を十分に活用し、冬でも屋外のクレークコートで練習できるのは、ヨーロッパではめずらしい。ほかのヨーロッパ諸国は、インドアコートで練習するか、または国外へ練習環境を求めて遠征する。スペイン選手は、自分の国で練習できるうえ、太陽を求めて練習に来るヨーロッパ諸国の選手たちと凌ぎをけずることができる。1月～2月は雨も降るが、ランニングやウェイトトレーニングを行い、自然と同化してテニスをする。休日は土曜日の午後と日曜日である。月曜日から土曜日の午前までは、怪我をしている選手も朝8時半には集合し、練習に取り組む。プロ選手になるための365日の努力を習慣づけることにほかならない。

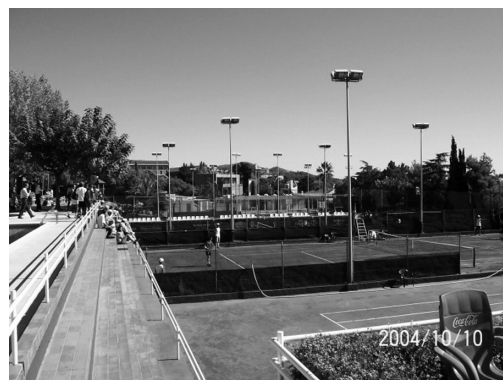
その多くはバルセロナを中心とするカタルーニャ地方、またはバレンシア地方に集中する。(マヨルカ島からは、スペインを代表するモヤ、ナダルが生まれた) 歴史あるテニスクラブが多く、バルセロナだけでも150余りのクラブがある。そのほとんどにトレーニングジムがついており、中には100年を越えるクラブ(センチュナリーテニスクラブ)もある。

国内での移動は車や鉄道・バスを利用すればかなり安くあがる。ホテルもフランス、イギリス、ドイツに比べればずっと安い。スペイン選手のほとんどは、経費のかからない国内遠征で腕を磨くことができるので、多くの若手、ジュニアがチャレンジできる。

②スペイン人気質と日本人気質の違い

スペイン人気質はテニスの強さにも大きく影響している。物事に対して一途に取り組むこと、あまり回りを気にしないでいられることなど、スポーツをする上において重要な要素である。とかく神経質になりやすい選手が多い中、スペイン人は小さなことにこだわらず、少しずつぼらな性格を持つ。日本人から見ると道徳性を欠いているようにも見えるのだが。

また、ラテン民族の特徴である“話し好き”は、選手とコーチのコミュニケーションに



スペインの青い空とレッドクレーク



レアルクラブの前で、伊達さん、サンチェスと



ジュニア選手にアドバイスを与えるコーチ



も役立っている。もちろん口論にもつながるが、お互いをぶつけ合い本音で話すため、大変わかりやすい。

日本人は繊細というよりも神経質であると感じる。細かいところに気を配りすぎ、エネルギーを消費し過ぎている。テニスに対する考え方、教え方は、もっとシンプルにあるべきであり、それを複雑にしすぎているように思う。繊細でいなければならない部分が違うとも感じる。自分の努力の成果がどうであるかより、自分の努力と成果がどのように人に思われるかが優先されているところがある。

また物事に対するの価値観も異なる。たとえばパーティーやイベント。日本では、主賓の欠席者がなく、時間通りに始まり、進行し、終わることが最優先される。しかし、スペインに限らずヨーロッパの場合は、大方の進行スケジュールはあるにしても、その中で起こるハプニングや出会いが何よりも優先され、参加者主体のものである。時間通りに進行しなくても、中身が重要であり、参加者自身が楽しむこと、交流を深めることが優先される。これは、スポーツの練習においてもいえることであり、コーチが自己満足のために練習時間を作るのではなく、選手が取り組める練習の質が何よりも重要である。

③ テニスとサッカー

スペインに住む前は、サッカーへの興味はさほどなかったが、スペイン・バルセロナに住んでみてサッカーの競技性、歴史、面白さにひかれた。テニスの強さもさることながら、スペインという国を支えるスポーツは何といてもサッカーである。バルセロナのスタジアムは10万人を越す観客が収容でき、老若男女がサッカーを楽しめる。スポーツの観戦方法の基本がサッカーなのである。テニス会場でもその雰囲気は同じで、特に国別対抗戦ともなれば、サッカーの応援そのものである。



バルセロナにあるカンプノ－スタジアム

(2) ヨーロッパテニス

① EUの団結

数年前のヨーロッパは、移動するたびにパスポート審査、ビザの有無、通貨の両替など、不便なことが多かった。しかし、今はEU統合からユーロの導入、協定の締結などにより、移動が大変スムーズになったことは海外旅行者にとってうれしいことである。ヨーロッパの国々は経済格差が激しく、ユーロの導入は国によって大幅な物価上昇へとつながり、国民の生活に影響を及ぼしている。しかしながら、サッカーやテニスをはじめとするスポーツにおいては、選手の交流、移籍など、今まで以上の動きが見られるようになった。

世界平和への発信、世界経済、国際社会におけるイニシアチブをとっていこうと

している。

テニスにおいても、ETA（ヨーロッパテニス協会）がジュニアをはじめとする若手育成に力を注ぎ、大きなひとつの国として戦略を立てている。

国柄や環境の違いは、選手の個性、プレースタイルにまで影響してきており、国境を越えいろんなタイプの選手と力を競うことができるのは、選手達の能力開発の大きなグラウンドとなっている。今後ますますその規模を増し、テニス選手発掘の中心となっていくであろう。

② グランドスラム

テニスにおいて、グランドスラムは誰もが目指し、訪れたいと思う聖地のようなものである。ヨーロッパには全英・ウィンブルドン、そして全仏・ローランギャロがある。ウィンブルドンは127年の歴史を持つ大会であり、今では特殊ともいえる天然芝コートの大大会である。ローンテニス発祥の地イギリスで、今も尚、伝統を守りながら進化し続けている。2000年には新しいスタジアムコート、プレスビルディングを作った。伝統を守り、大会を続けることの大変さは計り知れないことである。



ウィンブルドンのセンターコートとミレニアムビルディング

スペインに限らず、ヨーロッパではテニスクラブの歴史が長い。我々が20数年前に試合をしたことのあるテニスクラブが、今でも存在し、大会を続けている。

(3) アジアからの発信

今まで多くの選手、コーチが海外へ修行に行った。そのほとんどは、テニスの先進国であるアメリカ、ヨーロッパが中心である。今後も続けていかななくてはならないことであるが、まずは自分の国、地域の環境整備が何より重要である。特にアジアは、我々日本人にとって大切な地域である。

男子では、一昨年トップ10に入ったタイのスリチャパン、50位の壁を破った韓国のリー、世界NO. 1のダブルスペアとなったインドのパエス・ブパシ組、そして台湾からも若手が伸びてきた。女子においては、日本だけでなく中国、インドネシア、タイ、韓国など多くの選手がグランドスラムに出場する。若い選手達が競い合える環境整備、合同合宿、情報交換、そしてアジア地域の協力により、選手育成の基盤を作っていかななくてはならない。

また、2008年の北京オリンピックに向け、世界各国から多くのスポーツ関係者が、このアジアにやってくる。アジアのテニスをリードしていくのは日本である。まずは、その意思を持ち、積極的に取り組むことが重要である。大会の整備、指導者育成、そして普及。ジュニアのITF大会、ATPツアー、WTAツアーが、各国の選手育成、普及に生かされていらないのが現状であると思う。



（４）これからの日本テニス

日本テニスの現状と問題点

①学校と練習

世界との大きな違いは、学校システム、教育システムにある。練習時間の違いはもっとも重要な問題である。特に、15才から20才までのどの国にとっても育成が難しい時期に練習量と試合経験が少なすぎる。ここでいう練習と試合は質の高いものを指し、決して量だけの問題ではない。

現在の高校教育が大学に行くためだけのものであるなら、プロフェッショナルアスリートを目指す高校があっても良い。義務教育を終えているのだから、専門学校としての道もある。いずれにせよ高校生がテニスをしている現状は大切にしたい。それに夢を持たせるのは指導者の役目である。夢は果てしなく広がる。

②海外遠征

15才になるまでの海外遠征計画。ジュニア期でもっとも大切な時期にタイムリーに行なうことが大切。闇雲に海外に出て行けば強くなるという考えではなく、しっかりと準備してから出かけていくことが重要である。

③国内大会

ほとんどの大会が何かしらの全国の予選大会となり、勝つことのみが優先され、ジュニア期にもっとも大切な“プレーの質を上げる”ことがおろそかになってしまふ。ジュニア大会は地域大会主導型にして、全国大会はU-14、U-18（64ドロ）のみとすることにより、年齢にとられ過ぎない対戦、練習での成果を思い切り発揮しやすいものにする。こと。

各大会にコンソレーションをつくる。そして、全国大会はクレークコートかスローハードを探し、東京でない地方開催を軸として行なう。

シーズン制の採用、たとえば12月から3月まではインドア選手権、4月から9月まではクレークコート、10月から12月までハードコートなど、試合のサーフェスを限定する。その目的はジュニア選手が、①オールラウンドのテクニックを身に付けることと、②違ったタイプのプレーヤーが出現することでそれに勝つための戦術を考えること。

④テニスを取り巻く環境

現在、日本のテニスを取り巻く環境は厳しい。1970年代どの競技にも先がけプロ化に踏み切ったのがテニスである。スポンサー各社はテニスという国際性に目をつけ、大企業による大会がたくさんできた。しかし、バブルの崩壊とともにスポンサーは退いた。1993年にはサッカーJリーグの立ち上げにより、いっそう拍車がかかった。かつて日本テニスの看板であった大企業の名は、今はJリーグユニフォームの胸に見ることができる。

日本テニスの問題は“お金がない”からではないということ。そこに、ビジョンと熱意が欠けているからである。そして組織としての機能がなされていないことにあ

る。ヨーロッパでは、イギリス、フランスのグランドスラム大会を開催する国、そして経済国ドイツの予算は30億円～40億円とも言われる。しかし、そのほかの国々の予算は、日本テニス協会より少ない国ばかりである。その中でも、スペインは効率よくトップ選手を輩出している。

トップ100にイギリス（2）、フランス（7）、ドイツ（6）、イタリア（2）、そして中でもスペイン（17）がひとときわ多くの選手を輩出している。フランスの強化システム、スペインの大会システムという互いに違った特色の中で、強化の方法を探した結果である。イギリスはフランス協会からコーチを招聘しジュニアプログラムを推進しておりウインブルドンという世界一の大会（伝統、収益）を有するにもかかわらず、選手強化の結果がでていない。それに比べ、スペインは古典的な方法とも言える練習量とスタミナを武器に“個”の強さを追求する。まさに人間力のたくましさにある。

2004年12月、スペインは二度目のデビスカップを勝ち取った。選手・スタッフが仲が良く友情で結ばれているように感じた。利害関係にとらわれず、大局を見ての取り組みが何より重要である。

この二年間、今までに経験したことのない貴重な時間を持つことができました。生活することでしか感じられない文化的背景、習慣、感性が、スペイン人の練習の取り組みやスポーツ観に大きく関係していること。そして、近隣のヨーロッパ諸国の抱える課題や今後の可能性について現実を見ることができました。

これからもテニスを通じ、日本スポーツ界に貢献できるようやっけてまいります。

本当にありがとうございました。これをもちまして、研修最後のレポートとさせていただきます。